

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

# 文化高知

2015年5月 NO.185



[もくじ]

- 2～3 二十年目のカーニバル…田岡重雄
- 4～5 地域文化に「三方よし」…濱口友章
- 6～7 第十回美術作品コンクール、審査にあたって…松井みどり
- 8～9 第二十五回高知出版学術賞を審査して…中内光昭
- 10～11 素人のハチ飼い…成沢忠
- 12～13 高知市文化振興事業団3月～4月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「睡蓮」池内日菜

公益財団法人高知市文化振興事業団

# 二十一年目のカーニバル

田岡 重雄

一九九六年の十月末、いの町(当時吾北村)の上東小学校のすぐ隣、シヤクジョウカタシ(日本一の大きさの「薮椿」の愛称)の下で三十歳代の「音楽家」らと地元のおばちゃんが出会いました。

その時の会話。「映画に写って大きな椿ですよ。」「おそお、太いろお。春には真つ赤な花をどっさりつけるぞね。兄さんらはあどこから来た？」「大阪からです！」「そりゃあ遠くから来たねえ！何をしゆうがぞね？」「スティールパンという楽器の演奏や、舞台演出なんかをやってます」そのパンは何ぞね？食べたことがないね」「それなら、ここでいつかスティールパンの演奏をするので、聞いてくださいね」そんなやりとりがあつたにありません。

大阪から来ていたのは打楽器奏者の山村誠一さんらでした。その年から始まった、十歳を祝う「てんさい(十歳)集まれ！10年式」のゲストとして、催しを旧吾北村へ提案してくれた栗原雄二氏の紹介で来ていたのです。

この前年、映画「絵の中のぼくの村」(田島征三さん原作、東陽一監督、シグロ作品)のロケが、吾北村など高知県で行われ、シヤクジョウカタシも映画に登場していました。この映画を見て、山村さんらは、印象に残ったロケ地をキャンプして巡ったそうです。

高知市の北東、いの町の中山間地、吾北の上八川の東部に上東小学校があります。(戸数約五十戸、人口約百人)この小学校は二〇〇一年に休校になりましたが、今

でも地域の拠り所です。

かつてのPTA組織が母体になり、住民組織「上東を愛する会」が結成され、日本一の薮椿の下で、第一回「吾北・カタシの花祭り」を一九九七年に開催。約束通り山村さんらが演奏してくれました。

花祭りはその後毎年開催し(二〇一一年は休み)、今年三月二十九日、雨模様にも関わらずお客様は来てくださり十八回目を行うことができました(地域では並行して、営農組合活動、福祉活動ミニデイ上東笑楽校なども行っています)。

山村さんとの交流の中で、二〇〇五年七月「上東パンの学校」が開校しました。このパンは食べるパンではなく、ご想像のとおりスティールパンのことです。初回に

ました。

この学校から誕生したのが「高知カリビアンハーツ」で、山村校長が名付けてくれました。演奏活動は二〇〇八年の春から始め、最初は女性ばかりだったので「カリビアンガールズ」の名でしたが、男性も加わり二〇一三年末から現在のバンド名になりました。

一九八六年に、山村さんがニューヨークでスティールパンと出会い、その山村さんと私たちは、一九九六年に出会いました。以来、山村さんを通してプロの演奏者やその友だちにつながり、大阪や兵庫のスティールパン・ワークショップの参加者と、山村誠一主宰「ワンハーツ・スティールオーケストラ」として、大舞台での演奏機会も増えてきました。

「上東パンの学校」メンバーも、いの町だけでなく高知市、南国市、越知町、四国内などさまざまです。ハンマーを振って自ら作った楽器を演奏する人もいます。

上東小へも大阪、兵庫などから機会あるごとに駆けつけてくれ、ワンハーツ・スティールオーケストラ出演の「上東ゆうぞら音楽祭」を二〇〇九年の秋、初めて開催。その後、二〇一〇年、二〇一二年、二〇一四年のそれぞれ秋に開催し

演奏メンバーは、山村校長から新たな楽譜を、「練習あるのみ」というエールとともに受け取り、着実に演奏曲を増やしてきました。一方、上東地区の住民は、花祭りや音楽祭で、その成功のために様々な裏方も務めています。このような地域の家族的な雰囲気があり、上東ファンもじわじわと増加しているように思います。

カタシ(椿)の巨樹や休校中の校舎を拠点にした行事、人との出会いをもとに「上東を愛する会」や「上東パンの学校」は運営されています。取り組みを通じて、つながりが広がり、過疎地の元気につながっている実感があります。

「上東ゆうぞら音楽祭2012」へは、二階堂和美さんもゲストとして参加してくれました。二階堂さんは、今年のアカデミー賞に手が届く所まで行ったスタジオリの『かくや姫の物語』の主題歌、『いのちの記憶』を作詞作曲し歌っている方です。また、ワンハーツ・スティールオーケストラの1st CD「トロピカル歌謡」(二〇一一年)にも参加してくれています。

二〇一五年、上東パンの学校は十年目を迎え、百回目の教室は六



月に開かれます。この節目に合わせ、一年前から高知市文化振興事業団と山村誠一さんが準備し企画してくれたのが、五月六日(水)、かるぽーと大ホールで開催される「上東パンの学校十周年記念・STEEL CARNIVAL」です。

高知や大阪、兵庫のスティールパンの演奏者四十人がドラム缶七十台を並べて、四国初、大迫力のコンサートを開きます。そして、スペシャルゲストは、シンガーソ

は、山村誠一校長から、カリブ海の島国「トリニダード・トバゴ」で作られたこの打楽器の歴史や背景の座学もありました。イギリスの植民地時代、過酷な労働を強いられた人々が、楽器や音楽そのものを取り上げられた中、一九三〇年代に、試行錯誤の末に生み出した楽器だということです。



スティールパンは、使用済みのドラム缶を再生して作られます。ドラム缶の底をハンマーでへこませたり、微妙な手作業で、どこほこをつけて音の出る部分が作られています。「上東パンの学校」では、演奏を練習するコースと、ドラム缶から楽器を作る制作のコースがあります。

このスティールカーニバルへもぜひ、お誘い合わせ、おいでください。山村さんが上東を知るきっかけとなった映画のロケから、今年は二十一年目。

つまり、今回のスティールカーニバルは二十年を経た節目の催しとも言えます。またこの間に、上東中の閉校、上東小の休校などがありました。同時に何らかの祝祭(カーニバル)も続けて来た気がします。

山村誠一さんの情熱が原動力となつて、上東パンの学校が始まり、十年。音を樂しむ、人が笑顔になる、新しい人との出会いを樂しむ、お酒を樂しむことを十年続けてきたのです。そんな積み重ねが、私たちの心に、ここで住み続ける自信や誇りを育んでくれました。この高揚感、次の十年へ向かっています。

たおか しげお

一九六一年 いの町生まれ 在住  
いの町吾北地区の住民組織「上東を愛する会」事務局担当。いの町役場勤務。

# 地域文化に「三方よし」

濱口 友章

「売り手よし、買い手よし、世間よし」という言葉をご存知でしょうか。近江商人の「三方よし」という考え方である。近江商人とは日本の伝統的な商売人のことで、自己の利益の最大化だけではなく、商売を通してお客様にも喜んで、

さらに社会や地域にも貢献し、それぞれが良い関係を築いていこうという理念のもとで各地で成功した商人達のことである。私は平成二十六年四月から某公共ホールで勤務している。いわゆる指定管理者制度によって前の運営団体に代わり従事することになった。現在の組織は民間企業四社

による共同企業体として運営している。もともと私もその民間会社の一つに属しており、当時の勤務部署でも芸術、スポーツなどの文化事業やエンターテイメント事業に取り組み管んでいたため、今の業務自体には違和感はなかった。しかし我々のような民間企業が公共文化施設を運営していくことの意味や目的については簡単に答えがでるものではないように思える。おそらく考え続けていかなければいけない課題のようなものなのだろう。また公共文化施設を運営していくことにより地域文化にどのような影響を与えることができる

のか。私見ではあるが現在の考えを述べたい。

私たちは民間企業である。民間企業は売上や利益を求め、大切な目的としている。その目的を達成するためには、お客様に満足していただける価値を生み出し提供できるかどうかにかかっているといえる。企業の原理原則を簡単に説明すると、まず顧客の願望や欲求、興味といった需要とニーズによりサービスやモノなどの価値を創造し、それを的確な市場に流通させることで、顧客が購買に至り、売上といった利潤が発生する。企業はそれらを原資にして従業員

の給料や設備投資に転換していく。また企業が顧客となり運営に必要なサービスやモノを購入する側になったり、義務として各種税金も一連の過程で納めることになるのである。顧客にとってはサービスやモノを享受することで生活環境や心が充実し豊かになる。そしてこのサイクルを繰り返していくことにより企業だけでなく、それを取り巻く人や環境に良い影響を与えることになるのである。

これが民間企業の原理原則であり一般的にビジネスと言われているものである。もちろんそれらを逸脱し過剰な利益最大化ゲームのみを追求したり、法を犯す企業がないわけではないが、正しくビジネスを行うことで誰もが幸せになれるのだと思っている。

だがこのサイクルを上手く循環させていくことはそう簡単ではない、企業は日々、市場開拓に努め、顧客のためにサービスを追求している。他の企業も同様のことを考えているのでいつも競争にさらされている。しかしこれらは苦でも何でも無く、民間企業の最大の長所であり誇りなのである。しば

しば公共事業・サービスは富の再分配と言われる。それがもちろん必要であることは疑いようもない。ただそれだけではなく富を創出し、ていくことも必要なのではないだろうか。文化も同様に維持し向上させていくには富の再分配によるところが大きい、だがそれだけではなく民間のノウハウをいかすことにより富の創出がもたらされ相乗効果により文化もさらに発展するのではないかと私は考える。

例えば高度経済成長期におけるピアノ文化の発展は興味深い事例であろう。戦後日本が豊かになる中、とある楽器メーカーは自社の企業理念のもとに時代のニーズを的確につかみ、競合他社との競争から音楽教室を開設することになった。このプロセスによってピアノ人口は飛躍的に増加し、ピアノ文化は急速に広がっていったのである。ピアノを弾く人というのは、それまで多くの場合が一部の裕福な人たちの高尚な趣味であり、音楽家を輩出することを目的とするだけの狭き門を一般大衆にも開いたのである。これを単なる民間企業の販促活動と捉えるのか、音楽

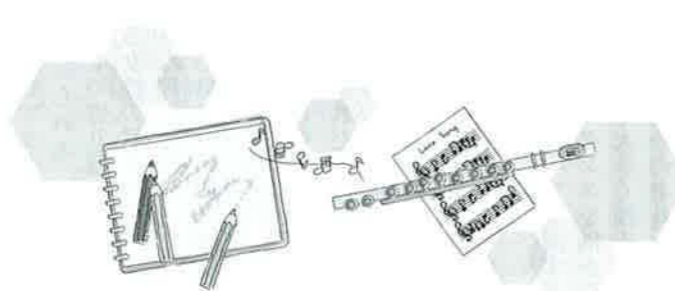
文化向上のためと捉えるのかは意見が分かれるかもしれない。しかし成果としてこの時代の多くの人たちがピアノに触れ、その人たちが演奏家や指導者となり今の時代に繋がる文化を形成したのは事実であり、誠実な行いがもたらした結果なのである。

また昨今ではインターネット技術やSNSの進歩により、eコマース（電子商取引）の市場はますます拡大している。そして企業と個人、企業間や個人間同士などあらゆる顧客をつなぎ、これまでは実現できなかったような新たな可能性が生まれている。その中の一つ、クラウドファンディングという手法は文化活動にも光明をもたらすかもしれない。これはインターネットを通じて、プロジェクトや活動に賛同してくれる人から資金を集める方法で、実際にクラウドファンディングを用いて伝統芸能や地域文化の継承、保護に活かそうという動きもあるという。もし出資者が多く集まり資金が調達できればこれまで不可能だったことも可能になるだろう。インターネットの技術進歩により情報などの伝

達や拡散、集約といった特定条件のものは時間や距離の制約がほとんど無くなり、リアルな活動領域として中央との地域の格差も無くなってきている。

経済活動と文化は密接に関係している。私はこれからの地域文化に必要なものは競争から生まれるサービスという価値や技術革新であり、顧客志向であり、成果に責任を持つことだと思っている。そのため大切な心構えとして近江商人の「三方よし」を大事にしていきたい。「売り手よし、買い手よし、世間よし」である。

はまぐち ともあき  
一九七九年 高知市生まれ



# 第十回美術作品コンクール、 審査にあたって

松井 みどり



二〇一五年に十年目を迎えた、高知市文化振興事業団主催の絵画コンクールの出展作品には、過去の講評で指摘された、「絵画というメディアウムに対して十分に自覚的でない」という問題点の露呈は少なかった。むしろ、絵画という、社会に最も普及した美術形式でありながら、複雑な美術史的意義を担い、特に西洋近代中心の美術史観の支配性が揺らぎ、絶対的価値基準が不在な現代の美術制作において、ますます重要になっている、「何故自分は絵を描くのか」、「自分の描く絵はこれまで

の美術史や現代社会との関係の中でどれほどの存在意義や独自性をもちうるのか」という問いを、そ



れぞれの方法で問い、独自の形に転位させようとしている作家が数多く見出された。一方で、一つのタブローのうちに自立した虚構世界をつくる絵画の西洋近代的枠組み自体から逸脱して、不特定多数の観客の、文化史やポップカルチャーにおける表象の記憶を喚起しながら、イメージを通して人間の個人的記憶と教養や嗜好の歴史を媒介する「イラストレーション」の役割を積極的に引き受ける試みも目を引いた。

出展作品からは、三つの際立った方向性が抽出された。第一の傾向は、絵画平面の物質性を強調し、絵画空間の人工性や、絵画表現の虚構性への作家の自覚を表明して、観客にもその人工性を意識させる技法上の実験である。描かれた絵画の表層に、物体の制御できない運動としてアクリルを垂らすことで、意味と物質という複数の相を重ね合わせる横江孝治、高知産和紙の質感と墨の筆跡の対照を通し

て空白にも意味が宿る心象風景を描き出す玉井祥子、ウッドパネルへの絵の具の染み込みと、ピースワックスのエッチングによる三次元的盛り上がりを組み合わせて、絵画表面の物質性を多層的に表現するとともに、記憶の中で修正される風景の印象を捉える上村菜々子、高知麻紙に、水干絵具や岩絵具などの異なる質感で描かれた生地や兔のシルエットによって、異次元から転送された事物の共存の印象を作り出す坂本聖斗などに代表される。ここでは、日本画の画材や工業素材が取り入れられ、モダニズム以降の絵画平面の実験に、日本の伝統的絵画制作や日常生活の諸要素が組み込まれている。

優秀賞の佐竹誠は、このグループに属す。さらに彼の絵画『もういなくても』では、油絵の具の溶解とぬめりのバランスと蛍光色の組み合わせを通して闇の中にまばゆく浮かび上がる夜の町の幻想性や電気のざらつきが伝えられ、至近距離ではぼやけたイメージが距離をおくと鮮明になる視覚効果によって、記憶の中の風景が蘇る感覚が伝えられるという、形式と意味の有機的一致が見られた。

第二の傾向は、強い感情や記憶の執着、とらえどころのない情緒のたゆたいを、ドイツ表現主

義、象徴主義、シュルレアリズムの絵画、象徴主義の影響を内在させた田中恭吉、藤森静男など日本の一九一〇年代の版画などの作風を呼び起こす、デフォルメや省略、装飾化を組み合わせた手法で捉えた絵画や版画作品である。内田八重、竹内麻、中澤ふくみ、稲田友加里、助石一枝など、該当作家がすべて女性であることに大きな意義が感じられる。優秀賞の竹内の『幸せの寄り道』は、店先で調理する女性の目の前のテーブルの上を小さな路面電車が走り抜ける異空間の合体や、事物の鄙びた佇まいとリトグラフの質感が調和してノスタルジックな哀愁を伝えた。助石のドローイングは、単色の面と線で描かれた女性の輪郭と空間の対比が映える省略の美を通して古風で物憂げなエロティシズムを呼び起こした。技法的不熟さはあるが、三段に仕切られ、幾何学的な森や花の意匠で埋められた舞台空間のような場所で展開する裸婦たちの苦悶のダンスを隅から見守る若い妊婦が大きく描かれた内田の絵画は、自らの身体と世界との関係性への女性の強迫的不安を伝え、身体は前に進みながら顔は後ろを顧みる赤い服の少女を、三角形の立体として白い人型の影に囲まれた画面中央に据えた中澤の絵

を見出し評価するとともに、才能ある個人が画家として生きていくための現実的環境を整備するための媒体として、高知市文化振興事業団主催の絵画コンクールが更なる進化を続けていかれることを心から願っている。

画は、思春期の実存的悩みに形を与えた。

第三の傾向は、マンガや、大正時代の童画やアールヌーボー（ともに日本の戦後マンガの源流のひとつ）の手法を継承し、観客の文化的記憶に訴えながら、同時に自己の内的風景や憧れを、親密でありながらも多くの人に共有される歴史的类型化をもつ表象や物質として提示する作品である。muu、島崎桃代、岩松宗明、野村葉月、村田奈美枝、宮川優希、横山千春などの作品がこれに該当する。彼らの作品は、本などの印刷媒体や看板という、生活の中で流通しながらその訴求力を浸透させていく媒体における具象表現の持続と発展を展望している。

最優秀賞を得た上島豊正の作品『有象無象の祝祭』は、この三つの傾向のどれにも属さない。そ



最優秀賞  
「有象無象の祝祭」 上島豊正



優秀賞  
「もういなくても、」 佐竹誠



優秀賞  
「幸せの寄り道」 竹内麻

れは、高知市の住民が日常的に集い飲食を共にする居酒屋の光景を、ピーター・ブリューゲルを思わせる動的な人物構成や祝祭気分の表現、テーブルに群がる人々とその頭上に張り出したバルコニーとそれを繋ぐ階段による舞台装置の構成、人々の歓声や体温さえ伝えるような暖色の色彩配分、人や物を網のように包みながら画面全体を律動や振動の渦のように満たして行く、波状模様の同形反復を通して描ききった、現代の民衆画だ。そこでは、西洋近代絵画からの引用が、共同体の祭があり、絵画はその記録装置であった時代の記憶と現代を繋げ、抽象的模様の視覚効果が出来事の感情的昂揚を身体的に観客に伝達する。それは、高知という都市の日常を歴史的絵画の様式に繋げることで英雄的なものと記録する叙事的試みであ

り、作者の意図的な、歴史的手法の再利用の試みが、絵画の公的役割の復権の可能性を示唆している。作家と評者が作品を前に制作の動機や技法について語り合うという、講評会の構造によって筆者は、作家たちそれぞれの絵画への信念を実感できた。それは、コンセプトチュアルアートが席卷し絵画の支配が崩された一九六〇年代以降ほぼ十年毎に繰り返されて来た「絵画の危機」宣言と絵画の再生の歴史の後全てが可能かつ相対化された世界で絵画を「現代美術」として制作していくことの緊張感を知っている筆者には、喜ばしい事に思える。同時に、コンクールへの出展や受賞が、制作スペースの確保やプロとしての作家デビューという実質的支援やステップアップにつながりにくいという問題点も浮かび上がった。作家の創造性

まつい みどり

美術評論家

東京大学大学院英米文学博士課程満期退学、プリンストン大学より比較文学の博士号取得。国内外の美術学術誌や企画展カタログに同時代の日本や英米の現代美術の潮流や作家について論文を多数寄稿。執筆カタログに『Super Rat: Chin ↑ Pom』(パル出版/二〇一〇)、『Ice Cream』(ファイブドット/二〇一〇)、『Little Boy: the Arts of Japan's Exploding Subculture』(ジャン・ンサエティ、エール大学出版部/二〇一〇)、『五』。著書に『芸術が終わった後のアート』(朝日出版/二〇一〇)、『マイクロボップの時代：夏への扉』(二〇〇七年/水戸芸術館)、『ウィンターガーデン：日本現代美術におけるマイクロボップの想像力の展開』(二〇〇九年/原美術館)。

# 高知出版学術賞を審査して

中内 光昭

創設以来四半世紀を迎えた高知出版学術賞は、今回から新たに「特別賞」が設けられることになった。この賞は、高知県書店商業組合副理事長として、本賞の創設を援助し、その後、高知市文化振興事業団の理事長を務めた、故吉村浩二氏のご遺族から寄せられた寄付を基金に設けられたもので、①文化の向上に資する、②出版の労を称えるに値する、③将来が嘱望され、奨励に値する、のいずれかに該当する作品に与えられることになった。

本年は十六点の応募があり、七名の審査委員により、二回の審査委員会を経て、次の三点（本賞二点、特別賞一点）が受賞作に選ばれた。なお、受賞作に順位はつけられていない。

## ◆本賞

中澤 保 著

『四国の野生を主とした樹木  
「県別分布・写真編」』  
(私家版)

著者は元特攻隊員。終戦により帰郷して営林局の職員として、四十年近くフィールドで勤務。営林局内で後進の育成指導をすると共に、高知大学農学部非常勤講師として、学生の指導も行ってきた。いわゆるアカデミックな経歴は持たないが、和田豊洲、山中二男という実力ある指導者に恵まれ、実地で、植物学の基礎と応用を学び、優れた植物同定力を身につけることができた。

その実力により、和田博士の「四国の植物分布とその生態」の校訂を担当し、その後、博士の業績に追加する新事実を多く発見した。

本書は、著者が六十年にわたりに行った、四国の野生植物を中心とした植生調査の総括である。高知県を中心に、他の三県からの報告も交え、四国の野生植物を網羅的に記録したもので、資料としての価値が極めて高い。内容は分布調査と写真に纏められているが、半世紀にわたり、フィールドで個々の植物を観察、記録したものの集大成で、地道な努力の跡がしのばれる。多くの植物で花の写真が提示されていて、学術的な価値に加え、一般読者へのガイドブックも



「四国の野生を主とした樹木「県別分布・写真編」」

兼ね備えた力作である。一般人々の自然に対する啓蒙や環境教育の資料としても有益な出版物と言える。

岡村 敬一 著

『京大東洋学者  
小島祐馬の生涯』  
(臨川書店 刊)

旧弘岡上ノ村（現、高知市春野町）に生まれた卓越した中国社会思想史研究者で、京都帝国大学人文科学研究所初代所長、文学部長を務め、総長や文部大臣などに嘱望されながら、定年後は、信念に基づいて帰農し、土を耕しながら地域の人々と交流した小島祐馬の生きざま、彼を育てた土壌、空気、人脈など、を克明に記述したもの。著者は京大卒業後、定年まで、大阪府立図書館の司書を務め、以後、私大に勤務、現在、京都ノートルダム女子大名誉教授。

本書は小島祐馬の東洋学を論考したものではなく、彼の京都時代の大学人としての行動や研究者との交流と、生涯を通じて見られた清廉潔白な人間像を、膨大な資料を駆使して浮かび上がらせたものである。

関連の図書、雑誌や新聞記事を丹念に整理し、小島と彼が生きた時代を鮮明に浮かび上がらせている。小島の帰農後の動静についてはあまり知られていなかったが、小島の死後、膨大な蔵書は、メモ類に至るまで、高知大学図書館に「小島文庫」として整理されている。筆者は文庫から多くの新事実を見つけ、小島の人となりを示すものとして紹介している。



『京大東洋学者 小島祐馬の生涯』

小島は帰郷後、学識を誇ることなく、地域の人々と対等に交流し、要望に応じて講演や寄稿など多忙な日々を送っている。学問や政治の渦巻く京都と、土を耕し農民と語る春野が、小島祐馬という希有な人物により、ごく自然に結びつけられたことが示されていて、読者に感銘を与える著書と言える。膨大な引用文献や索引も完備されていて、学術書としての価値も高い。

## ◆特別賞

高知新聞社 編

『MAKINO』

(北隆館 刊)

高知新聞社が、牧野富太郎生涯百五十年を記念して企画した連載を中心に、若干の資料を追加して刊行したものである。本書では、富太郎の人物像が、小説を含む伝記を参考に、実際に彼と関係深い土地を訪れて彼の足跡を辿ることにより、ダイナミックに描かれている。

世界的な植物学者であると同時に、愛すべき天衣無縫な人間であった富太郎という希有な土佐人を



『MAKINO』

活写した、優れた刊行物である。担当の竹内一記者は、さすが新聞記者、富太郎を取り巻く状況やそれに対する富太郎の振る舞いが、読みやすい文章で描かれていて、読者は彼の体験を追体験するような気分になる。金銭面に無頓着な牧野は書籍購入や採集旅行で多額の借金を抱えながら、平然と「わが道」を行き、いつも援助者に助けられる。まさにドラマを見ている気持ちになる。

審査委員の一人は、「牧野富太郎という人物を、伝記に書かれた郷土の偉人として崇拜するのではなく、彼のまるごとを、彼の足跡を実際に辿ることにより、『心身で感じ』て伝えようとした」書き

手の意気込みと筆力を評価している。マキノは国際的にも知名度が高く、読み易い本でもあるので、英訳してもいいのでは、という意見もあった。

牧野植物園やゆかりの人々が所蔵する写真等も紹介され、貴重な出版物と言える。引用作品のタイトル、発行年等の一覧表や索引がないのは残念である。

なかうち みつあき

一九三〇年 掛川で生まれる  
(本籍高知市)

高知大学教授、学長（二期）を経て現在、名誉教授。第二十五回高知出版学術賞審査委員長。専門は発生生物学。著書に『ホヤの生物学』（東大出版会）、『DNAがわかる本』（岩波書店）など。

# 素人のハチ飼

成沢 忠

思いがけないきっかけでミツバチを飼うことになった。おぼつかない知識で失敗したり成功したりしているうちに、すっかりはまっ

て、いまでは退職後の趣味として最適ではないかと思える。子供なら誰でもテントウムシやトンボ、セミなどの昆虫が大好きだろうが、その延長のようなものかも知れない。



写真1 二段重箱型巣箱

県内の山間部をドライブしていると、日当たりの良さそうな斜面とか土手に不思議な木箱みたいなものが見えることがある(写真1)。これはミツバチを飼っている、あるいはこれからそこにハチに入居してもらおうとする仕掛けなのだ。そのハチは日本ミツバチといって、この日本列島に古来生

息している由緒正しい種で、厳寒酷暑によく耐え、粗食に甘んじ、病気に強く、外敵に対しては死を賭して家(巣)を守る、という。まるで藤沢周平が描く江戸時代の北国小藩の下級武士みたいですがすがしい。ミツバチというと、ほとんどはいわゆる西洋ミツバチで、オーストラリア原産で大量に飼って蜜を採るのに適したものであるが、日本ミツバチはそれと似て非なるものである。西洋ミツバチはレンゲならレンゲ、白樺なら白樺と同じ花に群がって蜜を集める習性があるために養蜂業者は花を追って南から北に、あるいは北から南に、移動しながらハチ蜜を採る。一方、日本ミツバチは住み着いた場所に生涯留まり、近くに折々咲く花から集蜜する。違いがわかる人に言わせると、その蜜は

香りも味も最高で、かつ滋味に富んでいるとのことだ。雑密とか百花蜜と呼ばれ、日曜市などでも販売されている。  
ミツバチの一群は、女王バチ一匹、オスバチ数百匹、働きバチ(メス)二〜三万匹からなっており、それぞれの寿命は約五年、五〜六カ月、三〜四カ月、とのことだ。オスバチは働きバチより少し大きな体型で黒っぽく、繁殖期(三月から七月ごろまで)だけ現れる。しかし、オスバチは蜜を集めることはおろか、自分の餌(花粉が主)を採ることもできない無能者なので、時期を過ぎると餓死する。餌を与えられず、餓死するとはあわれないことだが、これは働きバチの心配らしい。働きバチはすべてメスだが、残念ながら卵を産む能力はなく、一生蜜や餌の収集とか、子育てや掃除に働き詰め、短命に終わる。死因はほとんどが過労死とのことだ。女王バチは生まれた時から特別待遇で、幼少からロイヤルゼリーなど栄養価の高いものを与えられ、産卵だけをもっぱらの仕事として長命だ。しかし、女王とはいってもすべてを心配しているというわけではなさそうので、分封するかしないか、分封したら

どこを新しい住まいとするか、オスバチを生かすか殺すか、など重要なことは働きバチの衆議によって決められるらしい。ミツバチ社会は女系民主主義といえるかも知れない。

して用意し、良さそうな場所に設置しておく、運が良ければ分封群が入居してくれる。しかし、ハチが好む巣箱や場所が正確にはわからない我々素人としては、もしハチが入ってくれたら望外の喜びとして幸福な気分になる。もう少し積極的な分封群獲得法は、ハチ球にそっと近づいて虫捕り網で球ごと捕獲し、用意しておいた巣箱

も発見が困難であきらめるしかない。また、せっかく捕まえて巣箱に入れたハチ群がいつの間にか逃げ出して翌朝には一匹も残っていないということもあった。箱が悪かったのか場所が悪かったのか、こんな時は悲嘆にくれるばかりだ。ふつう、箱は十分にアク抜きしたスギ材で作る、場所は小高く目立つところ東方向に向き、西日

が当たらないところが良いとされている、その通りにやっているはずなのに、と後悔しても逃げたハチが戻るわけもない。  
日本ミツバチの外敵は凶暴なスズメバチと陰湿なスムシで、ともに難敵だ。スズメバチの群に攻め込まれると、ミツバチはひとたまりもなく無残に全滅するしかない。スムシはガの一種だが、その攻撃はむごたらしい。なんとかして救うことはできないか、ハチという生き物を飼うことによって、ふつうには考えないいろいろなことに思い悩む。成功も失敗もあるがその過程はあとで振り返ると得難い楽しい経験である。田舎暮らしの良さであろうか。

ミツバチを飼っていて一番うれしいのは、分封したハチ群を首尾よく捕まえて、これで一箱巣箱が増えたぞとほくそ笑む時だ。分封は暖かく晴れた日の昼ごろに起こる。そばで見ていると、まず働きバチやオスバチが忙しく巣箱の口を出入りし、騒然とした状態になる。女王バチの出現で騒ぎはピークに達し、おびただし数のハチ群(一万匹以上といわれる)が一斉に飛び出して空高く舞い上がり、青い空が一転かき曇ったかと思われるくらいになる。その間に上空では交尾が行われて、一息ついたハチ群は近くの太木の枝などに集合して、スイカ玉くらいの球状に固まる(写真2)。ハチ球は半時間ほどはそのまま留まるが、その間に働きバチの偵察隊が四方八方飛び回り、新しく住み家とすべき場所を探す。いい所が見つかったら全員がそこに移動して分封は終了だ。この分封群を誘い込むために待ち箱と呼ばれる空箱を工夫

ごに素早く入れてしまうという方法だ。すべてのハチを網で捕まえることは不可能だが、ハチ球の中心部にいると思われる女王バチを逃さずに巣箱に入れてしまえば、残りのハチは自発的に巣箱に入ってくる。巣箱がまあ何とか満足がいくものならハチ群はさつそく営巣活動を始めるから、これで分封群の獲得作戦はめでたく成功というわけだが、失敗例も数々ある。一つは、ハチ球ができる場所の問題だ。運良く簡単に近づける場所にハチ球を作ってくればありたいが、傾斜のきつい崖の中腹などにできると近づくと危険か不可能となるし、遠く離れた場所だと藪の中を分け入って



写真2 捕獲板に集結中の分封群

なるさわ ただし

一九四四年 栃木県大田原市生まれ、高知市在住  
趣味として横浪半島で日本ミツバチを飼育中。高知工科大学・名誉教授。



ワンハーツ・スティールオーケストラ  
「STEEL CARNIVAL」



関西屈指のパーカッション奏者・山村誠一率いる総勢 40 名・80 台のドラム缶によるスティールパンオーケストラ！みんな思わず踊りだすカーニバルなステージ！  
スペシャルゲストに、スタジオジブリ『かぐや姫の物語』の映画主題歌などを歌うシンガーソングライター・二階堂和美を迎えます！

【日時】2015年5月6日（水・祝）13:30開場 14:00開演  
【会場】高知市文化プラザかるぼーと大ホール  
【料金】全席自由 前売り 2,000円 当日 2,500円  
お問い合わせ：高知市文化振興事業団 088-883-5071

イヴリー・ギトリス  
ヴァイオリン・リサイタル



現役最高齢のヴァイオリニスト、イヴリー・ギトリスと、指揮者としても活動中のピアニスト、ヴァハン・マルディロシアンによるリサイタル。クライスラーの小品やタイスの瞑想曲などのプログラムを 19 世紀の演奏様式でお届けします。人生の喜びに満ちた円熟の演奏をお楽しみください。

■日時  
2015年5月10日（日）14:30開場 15:00開演  
■会場  
高知市文化プラザかるぼーと大ホール  
■料金  
一般 前売り 5,000円 当日 5,500円  
高校生以下 前売り 3,000円 当日 3,500円  
■お問い合わせ  
高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「睡蓮」

池内 日菜

今の時期に鮮やかな色を付ける睡蓮を使用しました。  
他の花とは違い、水面に浮かぶ姿に魅力を感じ写真を撮りました。  
水彩画風に効果をつけることで水との関係をより強調するように加工しています。

(いけうち ひなノ  
国際デザイン・ビューティカレッジ1年生)

風俗

匂いに囲まれて

気づかぬ内に周りが変わっているという事はよくある。(略)秘密(略)保護(略)法にしても、学校教育法(略)の(略)改正にしてもそうだ。まあこの話はさておき、変わったといえ、最近のことかどうかわかっているか、家のなかにさまざまな匂いが充満し始めていることだ。  
シャンブーやリンスはもちろん、石鹸にもなにか香りが付いているし、洗剤にも匂いがついている。匂いのないものを探すのも一苦労で、石鹸粉のような無臭の洗剤に変えると、連れ合いに「古臭い匂いがする！」と一蹴されて、「老臭」を心配する私は腰が引けて強くはいえない。  
トイレペーパーだって匂いのないのを探すが、なかなか見つから

ない。涙をかもうとティッシュを当てると、そこでも妙にいい匂いがあるではないか。どうしてこうみんな匂いが好きなのだろう。しかも人工的な匂い。「ブルースト効果」という言葉がある。「失われた時を求めて」で、主人公がマドレーヌを紅茶に浸し、その香りが幼年時代を思い出す、という話から香りで思い起こされる記憶のことをいうようだ。ただ、こう周りに人工的な匂いばかりが漂っている、「ブルースト効果」もあつたものではない。だって、野の花の香りを嗅いでも、「遠い淡い記憶」は、トイレペーパーや洗剤の花の香りで消されてしまつたからだ。  
花の香りは花から嗅げばいい、ミントの香りが欲しければ育てればいい。花の香りを嗅ぎたいならば「花の咲いている野にあるがまま」に、その野に赴いて嗅げばいいのではないかと、いい過ぎかなあ……。(霖)

電子書籍

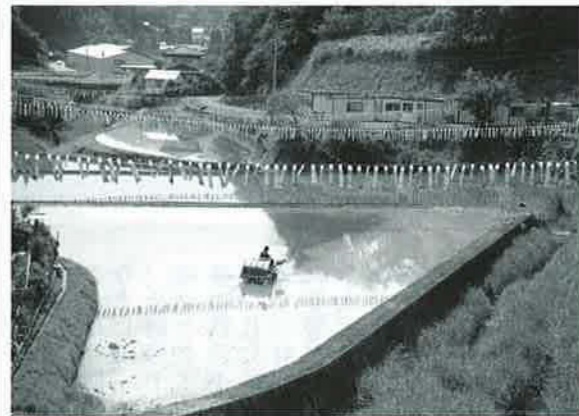


風俗歳時記

電子書籍にハマっている。IT 機器は全て苦手である。どうして、タブレットを買ったかというところ、本の置き場所がなくなったからである。本は重たい上に場所をとる。これ以上かえると生活するスペースがなくなるといって一歩手前まで来ていた。悩んだ末、電子書籍に手を出した。  
ところが、即ハマった。何冊買っても場所がふえない。タブレットは薄くて軽い。中に何冊でも本がはいり。その上文字が大きいから読みやすい。注文すると電波に乗って、本の全内容が五分で届く。タブレット一つを持って喫茶店に入ると、好きな本を次々読み流しながら、至福の時を過ごすことができる。

ところが妙な違和感を感じ始めた。一冊の本が読み終わらないのである。読んでも、読んでも、終わらない。いつの間にか他の本を読み始めていたりする。紙の本の長所に、このときはじめて気がついた。紙の本には厚さがある。この厚さが大切なのだ。  
厚さを手がかりにして、今どの辺を読んでいるかを測定できる。すると本を読む「気持ち」を調節できる。一冊の本でも導入、半ば、結末では肩の力の入れ方が違う。この力のコントロールが、電子書籍では、うまくゆかない。  
もう一つ、おやつと思ったことがある。この一年に読んだ本を思い出ししてみるとなぜか、目が覚めるような面白さを感じ

たのは紙の本なのである。書店で購入した本だ。タブレットに入れた本は、好みの本ばかりだが、それだけに衝撃がない。読んでみると、自己満足にふけっているような気がしてくる。  
そのうちに、あることに気づき愕然とした。本との出会いがなくなっている。書店に向くことなく、居ながらにして好きな本を手元を集めているうちに、好みの世界をなまめるくだらよっていたのである。  
タブレットを今さら手放すことはできないが、紙の本も見直したい。書店を魚のように回遊して、一冊の衝撃的な本とめぐり会いたい。…とせつなく願っている。(本の虫)



高知を撮る

第31回写真コンテスト入賞作品

里山に生きる・椿原

古味 良

(㊤平成26年5月11日 ㊦平成26年5月18日  
㊧平成26年5月27日 高岡郡椿原町)

機械で田植えをする若き後継者、家事の合間に茶を揉む母、炭を焼く支配は家長のじいちゃんの仕事です。農業の脈が家族に刻まれていました。



第67回

# 市展

アンデパンダン  
Independants

北見市美術交流作品  
デザイン  
ペン字  
写真  
工芸  
陶芸  
彫刻  
先端美術(立体)  
書道  
日本画  
絵画(洋画)

2015  
5/23 土 - 6/7 日

**時間**  
午前9時 - 午後6時  
【月曜日休館 初日は午前10時開場 / 最終日は午後5時終了】

**会場**  
高知市文化プラザかるぼーと  
7階市民ギャラリー

**入場料**  
前売300円 当日400円  
【療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳の各所持者とその介護者1名】  
及び長寿手帳所持者と高校生以下は無料

**出品**  
搬入日時：2015年5月17日(日)・18日(月) 午前9時 - 午後5時  
搬入場所：高知市文化プラザかるぼーと 7階市民ギャラリー  
出品料：1部門 / 一般 1,500円 学生 1,000円

お問い合わせ：高知市文化振興事業団 088-883-5071  
主催 / 高知市展代表委員会 公益財団法人高知市文化振興事業団 高知市教育委員会  
共催 / 高知新聞社 NHK高知放送局 RKC高知放送 KUTVテレビ高知 KSSさんさんテレビ

